

レオポルド・ブルームはなぜユダヤ系なのか？

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2012-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻, 昌宏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13126

レオポルド・ブルームはなぜユダヤ系なのか？

辻 昌 宏

ジェイムス・ジョイスの小説『ユリシーズ』の主人公は、レオポルド・ブルームであるが、彼は何故ユダヤ系なのだろう？ そんな一見素朴な疑問に答えるためには、様々な角度からの検討が必要である。拙論では、その疑問に対する一つの解答を、近年の歴史学の成果を援用しつつ試みてみたい。

ジョイスは、自分の勝手知ったるダブリンを舞台にしながら、なぜ、少なくともアイルランドに住んでいる時には深く知らなかったユダヤ人あるいはユダヤ系の人を、主人公に抜擢したのか。また、それは、当時のヨーロッパにおけるユダヤ人が置かれていた政治的、経済的、思想的状況とどう関わっているのかを明らかにし、そこから『ユリシーズ』を執筆する際に、ジョイスがアピールしたかったことが何であるのか（どうか、そんなものは intentional fallacy にすぎないと一笑に付さないでください）に迫ってみたいのである。

*

しかし、まずその前に、ブルームがなぜユダヤ系であるのか、という質問が、なぜ読者である僕の頭に浮かんだのか、浮かんだまま放置して忘れ去られなかったのか、という事情を説明しておこう。

筆者は、モダニズムの研究を遂行する過程で、モダニストは、宗教について悩み、方向転換することが、その人の世界観を転換し、詩法や小説世界の構築法を変えていったのではないかとの仮説をたて、モダニズムを代表する作家ジェイムス・ジョイス、詩人 W. B. イェイツ、T. S. エリオットおよび

イタリアの詩人エウジェニオ・モンターレ、ジュゼッペ・ウンガレッティの作品を読み進めている。

小論では、ジョイスを取り上げて、『ユリシーズ』ほどの大作の主人公をユダヤ系のレオポルド・ブルームにした理由を考えてみたい。端役であればともかく、中心人物とするのには、相当の理由があるはずだからである。ブルームは、厳密に言えばユダヤ人ではない。父がユダヤ人であるが、母がユダヤ人ではないからだ。ユダヤ人というのは、母親から子供に受け継がれていくのだ。ブルームは風変わりな人間で、ユダヤ系であるが、割礼は受けておらず、さらに、プロテスタントとカトリックの両方の洗礼を受けているのである。つまり、宗教的漂流者であるのだ。何度も宗派を棄てているのである。

こうした、自分がかつて帰属した宗派を棄てたモダニストは多い。ジョイスしかり、イエイツしかり、T. S. エリオットしかりである。後に紹介するジョイスの友人イタロ・ズヴェーヴォもそうであった。

しかし、無論、ダブリンの市民がこぞって改宗や棄教したわけではない。

つまり、ジョイスは、そういう人物をわざわざ主人公に選んだのである。

こういうユダヤ系の人物を選んだ理由を解明する際に、最近の歴史学の成果を援用して、ヨーロッパにおけるユダヤ人の移民の状況や、ユダヤ人の解放が、地域によって差を持ちつつも、どのように進んでいたかを含めて考えたい。ジョイスの場合、小説であっても、登場人物は、まったく架空の人物ではなくて、実在の人物あるいは実在の複数の人物の要素を混合させて出来上がっており、それに基づいて細部が書き込まれているからだ。

ジョイスの作品を初期のものから、といっても『ダブリナーズ』と『若き芸術家の肖像』のことであるが、読み進めると、ジョイスの小説の舞台は、ダブリンであって、しかもその細部に徹底的にこだわっていることが判る。伝記的な事実を調べても、『ダブリナーズ』にしても『ユリシーズ』にしても、ジョイスは、執筆中に、弟や叔母に手紙を書いて、自分が1904年

まで22年間暮らしたダブリンの町のディテールを確認させたり、情報を確かめたりしているのである。

そういうジョイスの作風を知れば、ブルームにも元になる人物がダブリンにいたと想像するのが自然である。しかし、実際は、そうではないと考えるに十分な理由があるのだ。まず、ジョイスのダブリン時代の知人で、ユダヤ系とわかっている親しい人はいない。さらに、ジョイスの時代のダブリンにユダヤ人はいたのだが、その典型例は、ブルームとは異なっていた、という歴史的事実があるのだ。

問題はこう言い換えることができる。「ブルームがユダヤ系であることは不自然である。あるいは、ダブリンのユダヤ系の人物として、ブルームは『ユリシーズ』の他の人物と比較すると、現実密着度が低い」。

ジョイスは『ユリシーズ』にいたるまで、小説の主人公にユダヤ系の人物をとりあげることはなかったし、ジョイスがダブリンで親しくしていた人物にユダヤ人はいなかった。

ここで歴史的な事実を参照しよう。Cormac Ó Gráda の *Jewish Ireland in the Age of Joyce* によると、1866年（レオポルド・ブルームが生まれたとされる年）、ダブリンには約200人のユダヤ人しかいなかったし、ベルファーストでもその数はせいぜい数十人に過ぎなかった（Ó Gráda 1）第一次大戦前夜でも、ダブリン郊外まで含めてユダヤ人の数は3,000人がやっとで、マンチェスターやモントリオールの十分の一だった。

19世紀後半から20世紀初頭にかけては、ユダヤ人がアイルランドを移民の目的地に選ぶことは稀であり、それは勘違いによるものか、競争が少ないことを計算してのものだったろう（Ó Gráda 4）。

また第一世代のユダヤ系移民の職業は、衣服の行商や、中古品の売買、金貸しといったものだった。ユダヤ人コミュニティーが大きくなるにつれ、仕立て屋職人や家具職人が増えていった。

ユダヤ人は、そもそもヨーロッパで、都会に集住する度合いが最も高い人

種である。それには宗教的な理由がある。ユダヤ教では、礼拝所で祈りを捧げるときに最低 10 人が必要とされるからだ。だから、アイルランドでは、第一次世界大戦前夜、ユダヤ人の 10 人に 9 人は、3 大都市、ダブリン、ベルファースト、コークのいずれかに住んでいた。他の都市にもいるがたとえば、リメリック (119 人)、ウォーターフォード (62 人)、デリー (38 人) といったところである (Ó Gráda 94)。

ユダヤ人のあらたな移民は 1870 年代に始まった。ロシア生まれのユダヤ人が 1880 年代に急激に増加した。1881 年には 198 人だったのが、1891 年には 1,111 人に達した。

一方、少数ながらそれ以前からのユダヤ人コミュニティもあり English Jews と呼ばれている。彼らは、主として中産階級で、英語をしゃべり、住所も市中に拡散していた。それに対し新たに来たロシア系、より詳しく言えばリトアニア系のユダヤ人 (Litvak Jews と呼ばれる) は、Little Jerusalem と呼ばれる地区に集中的に住んでいた (Ó Gráda 95)。

以上のことから判断すれば、もし、ジョイスがブルームをよりリアリスティックな観点からダブリンにおけるユダヤ人とするのであれば、古くからアイルランドに暮らしていた English Jew とするか、あるいはリトアニア系のユダヤ人として、Little Jerusalem に住んでいることにした方が、より自然であつたろう。

ところが実際には、ジョイスはそうしなかった。ブルームの父は、ハンガリーから来たユダヤ人であつたし、ブルームが住んでいるのは、エクルズ・ストリートで、ダブリン市のなかの北半分に位置する。Little Jerusalem は、South Circular Road およびその周辺の一部であり、市の南半分に位置する。

『ダブリナーズ』を書いていた時には、あれほど細部にこだわり、スタニスロースにこれこれの通りで事故があつたら救急車はどこから来るかなどと尋ねたり、ダブリンのある地点から別の地点まで歩いたら何分かかかるかを実

際に歩いてもらって確認するようなジョイスがこの「矛盾」に気づかなかったはずはない。

とすれば、訳あって、わざわざそういうユダヤ人にしたのだ、と考えるほかあるまい。その理由を考えてみたいのだ。

ここで、ダブリンのユダヤ人がブルームのモデルでないとするとどこユダヤ人がモデルなのかという疑問が生じる。それに答える前提となるのは、やはりジョイスのことだから、ダブリンのユダヤ人でなければ、彼が住んで実際にその生活ぶりを知っている町のユダヤ人がモデルであろうという仮説である。ジョイスは、ブルームを描くにあたっても、まず、内臓が好きであるとか、ほのかな小便の匂いが食欲をかきたてたとか、生活の細部に徹底的にこだわっているのだから、この仮定はそう見当はずれではなからう。

そこで、ジョイスがどんな都市に住み、その都市のユダヤ人と出会ったかを調べるのが次の作業となる。

ジョイスは、1904年にダブリンを飛び出し、チューリッヒに向かう。しかしそこではあてが外れて職がなく、トリエステに行くようにと言われる。ところが、トリエステに着いてみるとそこでも職がなく、ポーラ（現在のクロアチアのプーラ）に行ってやっと英語学校の教師の職を得る。

ポーラには7ヶ月ほどいたのだが、町については不満たらたらの手紙を父や弟に宛てて書いている。

以前に論じたことがあるので（明治大学経営学部『人文科学論集』第54輯、pp. 67-92）、ここでは詳細は省き簡単に結論だけを紹介するに留めるが、ジョイスは住む場所にこだわった人である。同じ都市の中でも何度も引越しをしているのだが、それは家賃の滞納、未払いという父親譲りのあまりありがたくない癖のためもある。しかしどの都市に住むか、どの都市が気に入ったかは、それとは別の次元で、彼の感性を反映していると僕は考えるし、それはかなり深い、無意識の部分の作用まで含んだものと思われる。

結論から言えば、ダブリンを除くと、彼はポーラが小さすぎて嫌いで、ト

リエステが好き、ローマは大嫌いで、チューリッヒはトリエステに次いで好き、パリは便利でよいといった評価になる。

興味深いのは、トリエステとローマの好悪がきれいに分かれる点である。ポーラは小さな町でローマは大都市であるが、どちらも気に入らず、一年以内に引っ越している。

もちろん、引っ越すにあたっては、仕事が絡んでおり、ポーラからトリエステに移ったときには、トリエステのベルリッツで英語を教えるポストがあったから越したのであるが、その後、ポーラに戻りたいとか、懐かしいといった言及は見あたらないし、ローマに関しても、トリエステに戻ってきてから、ローマに戻りたいとか、懐かしいといった言葉は聞かれた形跡がないのである。

それに対して、第一次大戦のため、そこから中立国スイスのチューリッヒへの移住を余儀なくされたトリエステは、第一次大戦が終了したあと、わざわざ戻ってきているのである。また、結局通算して10年以上暮らしているのである。

とすれば、トリエステが気に入ったとみて間違いなさそうである。では、なぜ、トリエステが気に入ったのか？

トリエステが気に入った理由は、5つ上げることが出来る。

1. 宗教が多様であったこと
2. 言語が多様であったこと
3. 海に面していたこと
4. 帝国からの独立運動があったこと
5. 都市の規模と歴史がダブリンとそう大きく違わなかったこと

1と2は地理的事情によるところが大きい。あるいは、地理的事情により、人種、民族が多様であったことに因ると言ってもよいだろう。3は地理的事情そのものであるが、ダブリンとの共通点およびジョイスの心性を考慮に入れる必要がある。4は、ダブリンとの相対的なポジションということが重要

である。

一つ一つ説明していこう。

1の宗教が多様であったこと。周知の如く、トリエステは、ジョイスが住み着いた当時はオーストリア領であったが、同時に、イタリア系住民が多数派であり、またユダヤ人もいて、スラブ系住民もいた。現在のトリエステは、イタリアに属しているが、スロヴェニアと国境を接しているし、クロアチアへもごく近い。

そのためイタリア系住民はカトリック、ユダヤ人はユダヤ教徒、スラブ系住民は東方教会（スロヴェニア正教会、ギリシア正教会など）に属しており、さらにはプロテスタントもいたのである。なぜ宗教が多様であったこと、異なる宗教が共存していることがジョイスにとって重要であったかの？ それは、ジョイスにとって、カトリック信仰を棄てたことがトラウマティックであり、カトリック教会が大文字の信仰を表象するものではなくて、数ある信仰の一つと感じられるような場所は、他所よりずっと心休まる土地であったからだ、と僕は考える。

2の言語の多様性は、オーストリアが支配ゆえのドイツ語、イタリア系の住民ゆえのイタリア語、スラヴ系の住民ゆえスロベニア語、クロアチア語が話されるわけである。これは3つ、4つの言語が共存しているというだけでなく、言語系統的にも多様性を示している。ドイツ語はゲルマン系で、イタリア語はラテン系で、スロベニア語、クロアチア語はスラヴ系である。系列の違う言語が日常的に入り交じっていることは、ジョイスの後の作風を考慮にいれると、彼はそういう状態に大いに興味を抱き、彼独自の方法でそういう現実を作品世界に取り込んだのだと言う事がいえると思う。

ここで、少しまとめておこう。ジョイスにとっては、立ち向かうべき大きな二つの敵ともいうべき存在があった。大英帝国（その言語は言うまでもなく英語）とカトリック教会である。どちらも、ヨーロッパ世界は言うにおよばず、全世界を支配する（その支配の仕方は、それぞれ異なっているが）、

あるいは支配する意欲に充ちた帝国なのである。

アイルランドの独立を切望していたジョイスにとって、そのさまたげになっている最大要因をこの2つとみなしていたと僕は考える。大英帝国は直接的にアイルランドを植民地にしていたし、カトリック教会は、アイルランド人の心、魂を支配して、現実への覚醒を妨げる機構となっていたのだ。だからこそ、ジョイスは、出版者グラント・リチャーズへの手紙の中で、短編集『ダブリナーズ』を、「道徳的歴史」の一章を構成するため、「我が国の魂の解放への一歩」となるために書いたと宣言しているのである (*Letters I* 62-63)。

道徳的歴史や魂の解放と言っているのが、主として教会への精神的隷属からの解放をさしているのは明らかだが、『ダブリナーズ』の「蕨の日の委員会室」や『若き芸術家の肖像』におけるパーネルによるアイルランド自治法への期待がどれだけ大きく、また、彼の失墜によってその望みが断たれたことへの失望がいかに大きかったかは歴然としている。パーネルの失脚を引き起こしたのが、カトリック的倫理観に基づく彼への誹謗中傷であったことは、ジョイスにとって苦渋にみちた経験であった。これもまた、ジョイス一家内での議論もこのようなパーネル支持と非難に割れたという伝記的事実を反映しているのである。

また、英語という言語に支配されていることへの抵抗も、彼なりに一つの回答を『ユリシーズ』や『フィネガンズウェイク』の多言語状況において示していると解釈することができよう。

ただし、ここで断っておかなければならないのは、たしかにジョイスは、カトリック教会や大英帝国、英語の支配に、アイルランド人が唯々諾々と従ってはいけなさと考えていたが、だからといって単純に愛国的なナショナリズムを信奉していたのでもない。彼は後に述べるズヴェーヴォと同様、熱狂的な政治的運動からは距離を置いているのである。ファナティックな立場に立てば、たとえば、英語の支配を嫌って、アイルランド語で書くという方

法もありうるわけで、実際、ジョイスも短期間ではあるが、アイルランド語を習ってはいるのだ。しかし、彼の場合、そういった全面拒否、別のものの選択に行くのではなくて、自分がある意味で育て、自分と切り離せないものは、その力を逆手にとって徹底的にしゃぶりつくすように利用するという戦略をとっているのである。

つまり、英語の様々な表現力を限界まで追求したのが『ユリシーズ』であると言えよう。たとえば、14章「太陽神の牛」での古英語から現代英語までの文体パロディや、最終章のモリーの独白（句読点抜き）のアクロバティックな実験をあげれば十分だろう。

また、『ダブリナーズ』でカトリック教会に精神的に服従して、魂の自由、覚醒を得られていないアイルランドの人々への批判的視座を露骨に表したジョイスは、次作『若き芸術家の肖像』においても、イエズス会系の学校に行き、神父への道を歩む瀬戸際まで行きながら、ぎりぎりのところで逆に、信仰を棄て、芸術家の道を歩み始めるという極めて自伝的な主人公を描いている。実際、ジョイスは、信仰を棄て、教会の定めた戒律に従わない人生を歩む。ノラとはずっと後まで法的に結婚しない。子供が二人生まれてからも結婚していない。ジョイスが登記所で結婚するのは、1931年のことであり、息子ジョルジョが結婚した翌年のことで、「遺言書のため」であった。

ノラもジョイスもカトリックの家庭に生まれ育ったことを考慮にいれば、当時としては破格のことであり、さらに徹底していることに、ジョイスは、息子ジョルジョにも娘ルチアにも洗礼をさずけなかった。ノラは、しばしば飲んだくれて帰宅する夫に対して、今度酔っぱらって帰ってきたら、子供を洗礼させますからね、とおどしたほどなのである。

こうしたエピソードだけを抜き出してしまえば、この作家はカトリック、キリスト教とすっぱりと縁を切ったのだと思われるかもしれないが、彼の育った文化は、学校歴も含めて、カトリック文化そのものである。

たとえば『ダブリナーズ』の冒頭の短編「姉妹」は神父の死がテーマとなっ

ているし、『若き芸術家の肖像』は、前述のように、ジョイスに似た若者が、イエズス会系の学校に通っていて、なぜ神学の道を進まずに、信仰を棄て、芸術家の道を取るにいたったかが魂の軌跡として克明に描かれている。

『ユリシーズ』にしても宗教的場面には事欠かない。まず第一章「テレマコス」から、母の臨終で祈りを捧げなかったスティーヴンが友人になじられる場面（これまた、ジョイスの伝記的事実に基づいている）があるし、また、終わりから二つ目の第17章「イタカ」は、教理問答（カテキズム）のパロディになっている。ただし、ここで注意しなければならないのは、現代ではカテキズムは問答の形を取っていないことである。第二ヴァティカン公会議以前は、カテキズムはいくつかのあらかじめ決められた質問とそれに対する答えを暗記するものであったのだ。言うまでもないことだが、ジョイスにおけるカトリック教会およびその文化は、あくまでも20世紀初頭のカトリック教会であって、現在のカトリック教会と連続性はあるものの、同一ではないことに注意を払う必要がある。

さらに、第10章の「さまよう岩々」は、19の断片に別れている。その1つ1つに様々な人物が登場してくる一風変わった章である。しかも、1つの断片が語られている最中に、それと無関係の小断片が挿入される。ある場面の情景描写のなかに、突然、別の場面でその時間に生じていることの描写が闖入するのである。その闖入する小断片は、別の一断片の一部であったりするのだ。

こういった仕組みのヒントになったのは、僕は、ロバート・ブラウニングの長詩 'Pippa passes' ではないかと考えている。ピッパの場合、4組のカップルのそばをピッパが歌いながら通るという形で、各カップルの繰り広げるドラマに彼女の歌が挿入され、登場人物は、その歌に影響を受けるという仕組みをとっている。

しかし、複数の人物が、相互に脈絡なく登場する点、また、そこへ、ピッパという女工の歌が連関なく挿入される点、登場人物（この場合はピッパ）

が漂うように移動を続けている点で、このロバート・ブラウニングの詩作品は、ジョイスに影響を与えた可能性があるのではないだろう。

現に、小説の登場人物ではあるが、『ダブリナーズ』の「死者たち」の主人公ゲイブリエルは、クリスマス・パーティのスピーチで、ロバート・ブラウニングの詩から引用するかどうか迷っている。聴き手の理解を越えるおそれがあるからだ。このゲイブリエルは、明らかにジョイス自身がモデルの人物であるから、ジョイス自身が相当にブラウニングの詩に親しんでいたと想像してよいだろう。

ブラウニングとモダニズムの関係はジョイスに留まらない。というより、むしろ、通常は、ブラウニングのドラマティック・モノローグ（劇的独白）という手法が、T. S. エリオットやエズラ・パウンドの初期の詩作品に影響を与えたことがしばしば言及されるのである。パウンドは、ジョイスの『若き芸術家の肖像』や『ユリシーズ』の雑誌連載を可能になるよう最も尽力した人物である。

さらには、ブラウニングは、イタリアの詩人エウジェニオ・モンターレにも影響を与えている。この詩人が、イタリアで、後に紹介するズヴェーヴォの名をイタリアで知らしめるのに大いに貢献した。ジョイス自身はその当時、パリにいてズヴェーヴォの名が国際的に知られる仕掛人となったのである。

ブラウニングとジョイスは、ともにイタリア滞在が長く、'Pippa passes'の舞台になったアゾロ（ここにブラウニングは滞在もしている）はヴェネト州にあるが、ジョイスが延べ10年以上にわたって滞在したトリエステは隣のフリウリ・ヴェネツィア・ジュリア州にある。こういった点も、ジョイスがこの作品をはじめとするブラウニングのイタリアを舞台とした作品に親しみを持つきっかけになったかもしれない。

ブラウニングは先にも述べたように、劇的独白が手法としてとりあげられがちだが、エウジェニオ・モンターレなどが影響を受けたのはそれのみではない。劇仕立てにすることとも無関係ではないのだが、ブラウニングの詩

世界では、いわゆる伝統的に美しいとされたものだけが主題となるのではなくて、人間の劇的葛藤やそういう葛藤が生じる状況を、いわゆる詩語だけでなく、抽象的な語、堅苦しい言い回しを用いて描いている。

あえて図式的に言えば、同時代のテニスンがエレガントでペトラルカ的であったのに対し、ブラウニングは、ごつごつとした言い回しも避けることなく、その代わりにより広い精神世界を描けるようになったダンテ的な詩人であったとすることができる。

現代詩人は、そこにも惹かれたのである。

ジョイスの場合、舞台はダブリンであるが、ダブリンの街のいくつかの地点で同時に繰り広げられる 19 のエピソード、ブラウニングの場合はアゾロでの 4 つのエピソード（これは、『ユリシーズ』と同じく、ある一日の出来事なのである）が描かれていくのである。極端な言い方をすれば、『ユリシーズ』の語りそのものの原形が、‘Pippa passes’であると言えないこともないのだ。

宗教性ということでも共通しているとも言える。ピッパは、自分の運命を神意 (providence) にゆだねている。ジョイスのエピソードでは、大きな焦点は二つになり、最初の断片の登場人物修道院長ジョン・コンミー神父（イエズス会、カトリック世界の代表）と、最後の断片の登場人物アイルランド総督（イギリス大英帝国の帝国主義のシンボル）が最も詳しく語られるのである。

以上、述べたように、ジョイスはカトリック信者としての行動様式を現実生活では捨て去ったが、作品世界ではむしろ丹念に拾い上げているのである。

トリエステが気に入った 3 つ目の理由は海に面していることであった。言うまでもなくダブリンも海に面している。同じイタリアで、ジョイスはローマが嫌いになって半年強の滞在を切り上げてトリエステに戻ってくるのだが、ローマは海に面していない。ジョイスがトリエステについて気に入っていたと思われるチューリッヒは湖に面している。そしてジョイスのお気に入りの

写真は、チューリッヒ湖に流れ込む二つの川の合流点に立つ自分の写真であった。

これは単なる偶然ではなくて、彼のように極めて知的で人工的な言語世界を構築するものにとって、その補償作用となるような自然あるいは自然を表象する存在が不可欠であったのだと思われる。それは、海あるいは湖という生命の根源たる水そのものの存在であり、またある時は、妙なスノビズムに染まっていないノラという自然体の女性の存在であっただろう。

トリエステが気に入った4番目の理由は、帝国からの独立運動があったことである。ジョイスが住んでいた頃のトリエステは、イタリア系住民が多数派ではあるのだが、領土としてはオーストリア領、ハプスブルク帝国の領土であった。そのため、イタリア系、さらにはユダヤ系住民には、イッレデンティズモ (irredentismo: オーストリアの支配下にあったイタリア系住民の多い土地を、未回復地と考え、それを祖国イタリアに併合しようとする1866年以降興った政治運動) への関心が強かった。アイルランドのイギリスからの自治獲得および独立運動については言うまでもあるまい。

ジョイスは、1907年から1912年にかけてトリエステの新聞 *Il Piccolo della Sera* に9編の記事が掲載されているが、その中には自治法やパネルについての記事があり、彼は、イギリスの懐柔策あるいは情報操作に対して断固として反対し、独立が必要であるという信念を持っていた (Joyce, OCPW x-xxii.)。

5つ目の理由は、都市の規模がダブリンとトリエステは似通っていたことだ。僕の考えでは、ジョイスはローマのあまりの大きさ、歴史的な蓄積の重さ、カトリック教会の存在感の大きさ、荘厳さに圧倒され、ショックを受けたのである。ここでは詳細は省略するが、ジョルジョ・メルキオーリは、ローマでジョイスがグリエルモ・フェッレーロの『若いヨーロッパ (L'Europa Giovane)』を読んだことが契機となって、『ユリシーズ』を構想することになったという。僕は、それに加えて、ジョイスがこの時期に、ローマに圧倒

されることによって魂の死を体験したことの意義を強調したい。トリエステに戻った直後には、本人が入院し、そこで妻ノラは一人でルチアを出産する。ジョイスの病気は従来、エルマンによりリューマチ熱とされていたが、Kathleen Ferris らの研究によると梅毒によるものである可能性が高い。ジョイスはこの時期、1906年から1908年にかけて、梅毒から発する様々な症状に苦しめられていたと考えられるのである (Ferris 63-65)。ジョイスは、魂の死と、肉体的な衰弱を経験し、そこから再生することになる。

こうした経験を経た後、ジョイスは、アイルランドに対する態度が変わる。具体的には、アイルランドやダブリンあるいはそこに暮らす人々への眼差しが、冷徹で厳しいものから、長所は長所として積極的に認めていこうという暖かみを持ったものへと変わるのである。

この時期、つまり、ローマからトリエステに帰った時期に、上記の出産、入院は別として、ジョイスには、文学に関して2つの事件が生じている。

一つは、イタロ・ズヴェーヴォとの出会いであり、もう一つは、短編集『ダブリナーズ』の最後を飾る「死者たち」を書き上げたことだ。ジョイスの眼差しの変化は、まず、この短編に現われている。

この短編の中では、主人公のゲイブリエル・コンロイが、クリスマス・パーティでアイルランド人の美点をあげる場面がある。その内容は、ジョイスが弟スタニスロースに宛ててローマから書いた手紙のそれとほぼ同じなのである。

それに劣らず重要だと思われるのは、「死者」は、初めて第三者から高く評価された作品だということだ。

その第三者とは、イタロ・ズヴェーヴォ夫妻である。ズヴェーヴォは周知のごとくその小説『ゼーノの意識』(1923)が20世紀イタリア小説の最高傑作とされる小説家であるが、当時は、1892年と1898年に2冊の小説を出版したものの、芳しい反応も得られず、執筆活動を事実上休止してしまった実業家であった。

妻の実家の家業を継いだズヴェーヴォは、会社の支社がロンドンにあった関係で、英語を習うことにする。いくつかの伝記では、この事情が誤解されているが、ズヴェーヴォは英語の読み書きが出来なかったのではない。G. A. Camerino の伝記が明らかにしているように、ズヴェーヴォは、1901年から英語を習っており、また度々渡英もしている。しかも、ジョイスが最初の英語の教師ではない (Camerino 313)。ズヴェーヴォの娘レティツィアによれば、自分の話を理解させることは出来たが、相手の言う事、特に工員のコクニー (下町なまり) が理解できなかったとのことで (Letizia Svevo 102-103)、これは実にもっともなことだ。今日のように、CDをはじめとする音声教材が充実した現在でも、イギリスに行った人はほとんどの人が経験することだが、いわゆるクイーンズ・イングリッシュを話す人は少数であり、それぞれの方言は非常に強いアクセントを伴い、外国人のリスニング能力にとって大きな関門となっているのだ。まして、ズヴェーヴォの時代、癖のある発音を学ぶ手段はなかっただろうし、その聞き取りに苦勞したことは想像にかたくない。

新たな資料が出て来ない限り、ズヴェーヴォがジョイスに英語を習い始めたのが正確にいつであったかは不明である (Gatt-Rutter 354) が、1907年にジョイスがローマからトリエステに帰ってきて間もなくと考えるのが妥当なようだ。

この時期は、前述のようにジョイスが短編「死者たち」を書いた時期と重なる。ジョイスは、9月6日にはこの作品をほとんど書き終えており、9月20日に校了した (Ellmann 263-264)。

そして、書き終えた原稿をジョイスは、英語を教えていたズヴェーヴォ夫妻に朗読していたのである。リヴィア夫人は、夫の死後 *Vita di mio marito* (夫の生涯) という本を著し、その間の経緯を記している。

年齢や国籍の違いにもかかわらず、二人の間には、すぐに友情が芽生

えた。アイルランド人は、それまで決して自分の文学作品について話すことはなかったが、すぐにヴィッラ・ヴェネツィアーニに原稿を持参するようになった。それは、『室内楽』という詩集の詩であったり、『ダブリナーズ』のなかのいくつかの章だった (Veneziani 84)。

ジョイスは、自分の生徒に自作を読み聞かせることはしなかったのだが、ズヴェーヴォに対しては例外だった。互いに、文学を解する人間であることを見て取って、授業は文学をめぐる議論となったのである。ヴィッラ・ヴェネツィアーニは、トリエステ郊外のズヴェーヴォの住まいである。ジョイスは、初めはベルリッツで教えていたが、ローマから帰ってきてからは、個人教授を始めて、生徒の家を訪問して教えていたのである。

ここで確認しておきたいのは、ジョイスはズヴェーヴォ夫妻に、自作の複数の詩、『ダブリナーズ』の中の複数の章を、朗読して聞かせていることである。読みかかせたのは、「死者たち」だけではないのである。

さらにリヴィアは続けていう。

『ダブリナーズ』の最後の章、「死者たち」という短編を朗読してもらったあと、私は庭に降りていって、花を摘んで、作者に献げました。夫は夫で、二つの忘れられた作品、まず小説『ある生涯』——これに夫は特別の愛着を持っていました——、それから『古い』を彼に差し出しました。まるでこう言いたげでした。「僕も作家でした」と (Veneziani 84)。

このエピソードを、僕は、次のように解釈する。ズヴェーヴォ夫人は、他の短編よりも「死者たち」を高く評価し、その印として庭に自ら降りて、花束をこしらえ、ジョイスに献呈したのである。また、その高い評価をズヴェーヴォも共有し、一人前の作家として認めたジョイスに対してうやうやしく、自分の過去の2作品（前述のように、トリエステで、第一作は多少評判になっ

たが、第二作はほぼ完全に無視されてしまっていた。そのため、ズヴェーヴォも、長編小説を書くことを止めていた）を差し出したのである。

ジョイスは、すぐに二冊を読み、次のレッスンで、自分の考えでは、ズヴェーヴォは不当に無視された作家だ、と宣言する。さらに、『老い』（Senilità）のいくつかのページは、フランスの最も優れた小説家にもこれ以上上手く書けないものだとして激賞した。思いもよらない言葉にズヴェーヴォは感激し、その日は、ジョイスが家に帰る道すがら同行し、これまでの執筆活動における失望を語った。

ズヴェーヴォがこうした苦々しい思いを語るのには、初めてだった。

重要なのは、その時以降、二人は互いの文学的プロジェクトや文学上の問題について倦むことなく語りあったということだ。ズヴェーヴォは次作となる『善良な老人と美しい娘』について、ジョイスは『ユリシーズ』へと展開されることになるブルームのコンセプトについてあらゆる細部をズヴェーヴォと議論した（Veneziani 85-86）。

ジョイスとズヴェーヴォが意気投合したのは、単に文学に深い関心があったからだけではないと僕は考えている。

彼らには共通点が沢山あった。①兄弟が大勢いた、②裕福な家に生まれたが、父親が零落し、学業を途中で中断させられた、③宗教を棄てた、④社会主義者であった。

③については説明がいるだろう。二人の宗教に関する家庭環境は全く異なるのだ。ジョイスはカトリックとして育った。しかも、イエズス会の学校に進学し、秀才であったため神父になるようスカウトされ、本人もその可能性を一度は考えるのだが、迷った末、芸術家になる道を選ぶ。この経緯は、『若き芸術家の肖像』に描かれている。しかし、その後は、彼は信仰を棄て、カトリック教徒として義務とされていることをことごとく破る。ノラと駆け落ちして海外に暮らすようになって法的に結婚をしないし、子供が生まれても子供に洗礼を授けていない。

神父にならないからといって、これほどまでに、反抗的になる必要はないはずだ。これほどまでに、教会から距離を保とうとするには、理由があるはずである。ジョイスは、カトリック教会からの精神的独立が、アイルランドの独立にとって最重要事項の一つと考えていたのである。その激烈な実践を自ら示したわけである。逆に言えば、そこまでしなければ、精神的な独立を保つことがむずかしいほど、カトリック教育、カトリック文化は、ジョイスの身体に深く染み込んだものとなっていたとも言えよう。

彼が自らを社会主義者というのは、今日のわれわれからすると奇異に聞こえるかもしれない。ジョイスは政党に所属したり、狭義の政治活動には従事していないからである。しかし、当時は、社会主義には様々な流派があり、マルクス主義あるいはマルクス・レーニン主義に収斂していなかった。だから、ジョイスの場合には、自らを社会主義者と名乗っているのは、今日で言えば、自分は教会に影響されぬ世俗主義者（イタリア語でいう *laico*）と規定した方が適切であると考ええる。

ズヴェーヴォも信仰を棄てているが、ジョイスと経緯は異なる。ズヴェーヴォは両親がユダヤ人で、学校もトリエステのユダヤ人学校に行っているのだが、ズヴェーヴォは夫人となる女性がカトリックだったのだ。彼らは民事婚 (*matrimonio civile*, 教会でなく結婚式をあげること) で 1896 年 7 月 30 日に結婚式をあげる。

当時のトリエステはオーストリア・ハンガリー帝国に属しており、その法律では、民事婚は、非信者間の結婚に限られていた。そのため、夫も妻もあらかじめ、いかなる宗派にも属していないことを公的に宣言する必要があった。ズヴェーヴォにとってそのことはさほど問題でなかったようだが、妻のリヴィアにとっては、カトリックであることを宣誓して棄てることは大きな苦痛であった。

妻の実家ヴェネツィア・ニ家は、実は、ズヴェーヴォ（本名はエットレ・シュミッツ）の親戚であった。妻リヴィアの母オルガは、ズヴェーヴォの従

姉妹であった。オルガの父ジュゼッペ・モラヴィアとズヴェーヴォの母アッレグラ・モラヴィアが兄妹（弟姉？）であったのだ（Cavaglion 10）。すると、どうして、一方がユダヤ教徒で、他方がキリスト教徒（カトリック）なのかという疑問が湧くが、その理由は明快だ。オルガは改宗ユダヤ人なのである。彼女の父や祖父はユダヤ人であったけれども、本人はカトリックとしての洗礼を受け、ミサに通い、娘リヴィアは、修道女の経営する学校に通わせていたのである。

当時、オーストリア・ハンガリー帝国内では、こうしたユダヤ人の自発的な改宗がまま見られたのである。

ここでトリエステのユダヤ人の歴史をざっと見ておこう。

中世においては、トリエステのユダヤ人は、周縁的な存在で、100人を越えなかった（Catalan 11）。ユダヤ人が増えたのは、カルロ6世が、トリエステをポルト・フランコ、関税のかからぬ自由港にしてからである。ハプスブルク家にとっては、トリエステは貴重な海への出口であったため、大いに優遇策をとり、宗教に関しても他の地域にはない自由と特権を非カトリック教徒に与えた。

その結果、数十年の間に、レヴァント地域の人々、ギリシア人、ユダヤ人の人口が目立って増えたのである（Catalan 12）。さらにマリア・テレジアの息子ヨーゼフ2世は、1781年に啓蒙専制君主として、宗教寛容令（Toleranzedikt）を發布している。

その結果、トリエステのユダヤ人人口は、1735年の103人から1832年には2,569人となり、全人口の約5～6%を占めるにまで至った（Catalan 59）。

1867年にはユダヤ人が解放され、職業や居住地が自由になる。ヨーロッパで、ユダヤ人の中産上層階級が形成される（Catalan 63）。

こうしたこともあって、1848年以降には、ユダヤ人の若い世代の間に、「宗教的無関心」（indifferentismo religioso）が広がる（Catalan 230-231）。一つには、ユダヤ人の子弟も公立学校に行き、カトリック教徒の子弟と机

を並べて勉強するようになったからである。

さらに、1867年のユダヤ人解放以降は、父祖の宗教を棄てる若者も出てくる。

ユダヤ人でユダヤ教を離れた者に関するトリエステでの統計は次の通りである。

	棄教宣言者	カトリックへの改宗者	男	女
1871-1880	64	5	36	28
1881-1890	76	28	49	27
1891-1900	109	50	54	55
1901-1910	175	71	105	70
1911-1915	58	20	38	20

また、異なった宗教間の結婚 (matrimonio misto) の数の推移は次のようになっている。ただし、統計が完全ではなく、1882年、1901-1904年、1915-1916年のものが欠けている (Catalan 243)。

	異なる宗教間の結婚数
1881-1890	92
1891-1900	150
1901-1910	90
1911-1917	93

以上の統計は、数字であって、それぞれの宣言や改宗には様々なドラマがあったに違いないことを考慮にいれなければならないが、それを断ったうえで、1867年のユダヤ人解放以降、トリエステのユダヤ人の同化が進んでいたということは言えるだろう。

トリエステだけではないが、解放以降は、ユダヤ人の中には、改宗して積極的に社会階層を登り、経済、政治活動にうって出るものが現われたのである。

ズヴェーヴォ夫妻の場合も、特に夫人の実家ヴェネツィアーニ家はここに

あてはまると言ってよいだろう。

ズヴェーヴォの姑オルガはカトリックで、夫人もカトリックであった。民事婚をあげたあと、夫人は妊娠するが、そこで身体の具合が悪くなる。姑と妻の嘆願にこたえ、ズヴェーヴォはカトリックに改宗する。1897年7月、リヴィアは、カトリック教徒に戻り、ズヴェーヴォは秘密裏に教区司祭の家で洗礼を受けた。

同年8月25日、二人は二度目の結婚式を宗教婚でとりおこなった。それから一ヶ月経たぬ9月20日に娘のレティツィアが生まれた。

以上がズヴェーヴォのユダヤ教を棄てた経緯であるが、彼は、決して熱心なカトリック信者となることはなかった。わざわざ、自分の葬式は、無宗教(civile)の葬式でやるようにと書き残しているほどである。

ここでジョイスとズヴェーヴォの共通点に話は戻るが、経緯に大きな相違はあるものの、二人とも生まれ育った宗教を棄てた点が共通しているのである。そこで、彼らの心に空白の領域が生じる。その空白は、普通の日本人の想像を越えた大きな虚空、真空地帯であって、それを放置して平然としていられるものではない。それは、何とかして、何か別のもので埋め合わせねばならぬものなのだ。それを埋め合わせるべく、彼らは、宗教に依存しない世界観を構築する必要があった。それは格闘ともいうべき、これまで西欧人が経験したことのない領域であり、容易ならざるものであった。だからこそ二人とも社会主義者を標榜したのであろう。

つまり、ヨーロッパ社会に深く根ざしているイデア的なものへの希求を、宗教によらず、理性で追求する一つの可能性が当時の社会主義だったのである。

ジョイスは、『ダブリナーズ』以来、アイルランド人に魂の覚醒を求めているわけだし、ズヴェーヴォは、1923年に出版される『ゼーノの意識』では、常に原因不明の不安に苛まれているゼーノが、最後の場面で、第一次世界大戦が勃発し、ある最終兵器が造られることを想像し、その兵器の使用に

よって、地球がこっぱみじんになるこの世の終わりを想像したときに心の平安を得る。これを、欧米のほとんどの批評家は、ズヴェーヴォのペシミズムと解釈しているが、僕はそう考えない。信仰を失った現代人の抱える不安は、現世がこういう形で終わりうるというヴィジョンを得て、はじめて解消されるのである。それは良くも悪くも、理性によるこの世の終わりである。科学の帰結による終末といっても良いかもしれない。それが、ずっと漠然たる不安に繰り返しおそわれ、包まれてきたゼーノ（S という精神科医の治療を受けている）を解放することになるのだ。

こういう小説を書くことになる男との出会いは、ジョイスにとって、極めて意義深いものであった。

才能があるのに不遇で認められていない、というのもお互いがお互いを認め合い共感した重要な要素だろう。後に、それぞれアイルランド文学、イタリア文学の20世紀最大の小説家とされる二人であるが、当時は、二人とも文壇の本流からは遠く、ほぼ無名の存在だったのである。

『ユリシーズ』を構想中だったジョイスは、ズヴェーヴォを、ユダヤ人だったらこんな時どう考えるか、感じるかという質問攻めにした。

ズヴェーヴォの父はハンガリー出身のユダヤ人である。

『ユリシーズ』の主人公の核が、ズヴェーヴォであることは、ほぼ確かめられたといってよいだろう。そのこと自体は、既にエルマンをはじめとして多くの人が指摘している。ただし、拙論では、ジョイスがなぜズヴェーヴォおよびトリエステのユダヤ人を、わざわざダブリンで展開する物語の主人公にしたのかを明らかにしなかったのである。

前に述べたように、アイルランドのユダヤ人は、昔からいた English Jews であるか、あるいはリトアニアから移住して来たものが多かったのである。しかも、リトアニアからの移民は、ユダヤ人地区に集住しており、中産階級にはなかなか上昇できなかった。トリエステは、ハプスブルク家が後押しして町の振興を図った時に、中産階級が固まっていなかったので、移住

してきたユダヤ人が中産階級になれるチャンスが大いにあったのである。それに対し、ダブリンは古い街だったので、19世紀になってやってきた移民のユダヤ人が中産階級に登れる可能性は小さかった。

*

以上のことから、慨然的にはあるが、ブルームのモデルは、トリエステのユダヤ人、小説家イタロ・ズヴェーヴォを核として、他のユダヤ人の諸要素をとりいれたものと言ってよいだろう。

それにしても、何故、ジョイスはトリエステのユダヤ人を主人公に選んだのであろうか。

僕はこう考える。ジョイスは、アイルランド人が、二重の隷属状態からなんとか解放される方法はないか、と考え、解放が可能であることを示すようなアイルランド人のための叙事詩（小説）を書きたい、と思っていた。二重の隷属とは、カトリック教会と大英帝国への隷属である。

その二重の隷属から逃れている人間のモデルとして、トリエステのユダヤ人は好適だったのである。

トリエステのユダヤ人は、カトリック教会には当然隷属していない。それどころか、ユダヤ教からも自由になっているものが少なくない（特に中産上層階級以上）。その上、オーストリア・ハンガリー帝国のもとで、少数民族であるにもかかわらず、社会的な地位を得て、経済的にも繁栄しているユダヤ人が少なくないのである。

こうした点が、これこそがアイルランド人の参照すべき点であるとジョイスが考えたとしてもおかしくはない。

さらには、ズヴェーヴォ自身の、自らに対して、外界に対して、ユーモアや皮肉にみちた視点を持つこと、これも、「激しい気質」（S. Joyce xii）のジョイスにとっては、驚きであり、闘うということが、ムキになるだけではないと自然に教えてくれたことであろう。

ジョイスは、第一次大戦中、『ユリシーズ』を書き続けたチューリッヒで

の友人フランク・バッジエンに対し、自分の書いている主人公は 'complete all-round character' なのだと述べ、「わたしは彼をあらゆる角度から見ているので、オールラウンドなのだ。しかし彼は完璧な男—善良な人間でもある」と付け加えている (Budgen 15-17)。

かつてのジョイスは、あるがままのダブリンを鏡のように写し出すことを目指していた。しかし、ローマ体験を経て、ズヴェーヴォに会って、作風が変わった。図式的に言ってしまうと、スティーヴンは現実態（現実のダブリン人、ジョイスがモデル）であり、ブルームは可能態（こうもあり得べきダブリン人）である。

可能態を追求するにあたっては、ズヴェーヴォとの出会いが決定的だった。ズヴェーヴォは、ジョイスが知る象徴派や世紀末の文学者とはまったく異なった生活人であった。良き夫、良き父であり、会社経営にたずさわっている。彼は、形式的にはユダヤ教からカトリックに改宗したが、心はそれに支配されていない。トリエステのオーストリア支配に反対しているが、だからといって熱狂的な活動家でもない。こうした態度、考え方の観察、質問による確認作業をへて、ジョイスの濾過装置によりブルームへと結晶したのである。

ブルームのノンシャランな生き方こそが、アイルランドの現状を打破する解毒剤だとジョイスは信じていたのではないだろうか。

引用文献リスト

I. James Joyce 執筆のもの（略称を用いる）

Letters I (Letters of James Joyce, Vol. I.) Edited by Stuart Gilbert. New York: Viking, 1957, 1966

Letters II (Letters of James Joyce, Vol. II.) Edited by Richard Ellmann. New York: Viking, 1966

Letters III (Letters of James Joyce, Vol. III.) Edited by Richard Ellmann. New York: Viking, 1966

OCPW (Occasional, Critical, and Political Writing) Edited by Kevin Barry. Oxford: Oxford University Press, 2000

II. それ以外のもの

- Budgen, Frank, *James Joyce and the Making of Ulysses*, Bloomington: Indiana University Press, 1960
- Camerino, Giuseppe Antonio, *Svevo*, Torino: UTET, 1981
- Catalan, Tullia, *La Comunità ebraica di Trieste (1781-1914): Politica, società e cultura*, Trieste: LINT, 2000
- Cavaglion, Alberto, *Italo Svevo*, Milano: Bruno Mondadori, 2000
- Ellmann, Richard, *James Joyce*, New York: Oxford University Press, 1982
- Ferris, Kathleen, *James Joyce and the Burden of Disease*, Lexington: The University Press of Kentucky, 1995
- Gatt-Rutter, John, *alias Italo Svevo: vita di Ettore Schmitz, scrittore triestino*, Siena: Nuova Immagine Editrice, 1988, 1991
- Joyce, Stanislaus. Introduction. *As a Man Grows Older*. By Italo Svevo. Trans. Beryl De Zoete. New York: A New Directions, 1949
- Ó Gráda, Cormac, *Jewish Ireland in the age of Joyce: A Socioeconomic History*, Princeton: Princeton University Press, 2006
- Svevo Fonda Savio, Letizia and Bruno Maier. *Italo Svevo*, Pordenone: Studio Tesi, 1981, 1991
- Veneziani, Livia, *Vita di mio marito*, Milano: dall'Oglio, 1976

(つじ・まさひろ 経営学部教授)